

寄宿舎

自ら気づき、考えて行動する生徒を育成する生活作りⅡ（1年次）

～生徒の将来を見据えた見守り優先型の環境作り①～



舎友会活動（歓迎会）の様子



配膳当番の様子



朝清掃の様子



余暇活動（七夕）の様子

令和7年度 寄宿舍研究

主題 自ら気づき、考えて行動する生徒を育成する生活づくりⅡ
～ 生徒の将来を見据えた見守り優先型の環境づくり① ～

1 研究主題について

(1) 主題設定の理由

本校寄宿舍では「主体的に学び、関わる力を伸ばしながら、社会自立を目指す人を育てる。」の学校教育目標のもと主体的な生活が営めるような指導方法の研究に取り組んできた。生徒自身が将来に希望を持ち、仕事と生活を両立させながらよりよく生きていけるように基本的な生活習慣の形成と身につけた力を様々な生活場面で発揮して欲しいと願っている。

前研究の「自ら気づき、考えて行動する生徒を育成する生活づくり」では、生活、社会、自主、健康からなる4領域の指導方法を見直したことで、生活の流れを止めて行う一斉指導から実際に活動している場所場面で行う個々への指導へと転換が図られた。また、生徒自身が「何を学ぶのか。」「どう学ぶのか。」を、対話を通して気づき、考えて行動するための指導に取り組んだ。その結果、指導員との対話だけでなく、生徒同士が意見やアイデアを出し合うことで新たな気づきが生まれ、互いに高め合って行動する姿が見られるようになった。指導においては見守りの姿勢を大切に、指導員間での引継ぎや話し合いの中で具体的な指導方法を共有していくことを確認しまとめとした。

本研究では、「自ら気づき、考えて行動する生徒を育成する生活づくりⅡ」と題し、仲間と共に生活をしながら相手を気遣う気持ちを持ち、仲間の行動を見て学んだり、真似したりすることが、生徒自身が描く将来像と繋がっていくよう、さらに深めていく。前研究の成果と課題を踏まえた見守り優先型の指導の工夫をする中で、指導員との対話や指導員の働きかけが生徒一人一人の生活に、より効果をもたらすためにはどうあるべきか、活動内容をどう工夫すると良いのか、実践を通して取り組んでいきたい。

2 研究のねらい

寄宿舍生活を通して、仲間の行動を見て学び、気づけるようになるための、互いに高め合う生活づくりに取り組む。

3 研究の内容

(1) 研究の視点

視点1：寄宿舍個別の生活支援計画に寄宿舍版ルーブリック表(*)を活用する。

視点2：4領域の指導を通して、見守る姿勢を大切にされた指導の在り方を検討し、共有する。

(2) 研究の方法

①視点1:「寄宿舍個別の生活支援計画に寄宿舍版ルーブリック表を活用する」について
ア 生徒にとって学びのロードマップとなり、主体的に成長しようとする姿をサポートするための「寄宿舍版ルーブリック表」を作成する。

- イ 寄宿舍個別の生活支援計画の「目標・手立て・まとめ」との関連に留意し、生徒が取り組みやすいように工夫することで寄宿舍版ルーブリックへの理解を深める。
- ウ 寄宿舍版ルーブリック表が寄宿舍個別の生活支援計画の「目標・手立て・まとめ」の根拠としてどのように有効かを検討する。

②視点2：「4領域の指導を通して、見守る姿勢を大切にした指導の在り方を検討し、共有する」について

- ア 4領域(生活、社会、自主、健康)の指導方法の一つとして「寄宿舍版ルーブリック表」を取り入れる。
- イ 生徒自身が仲間の行動を見て学び、仲間と共に考え、他者の意見を取り入れながら問題を解決するための見守り優先型の指導の工夫を指導員間で共有できるようにする。
- ウ 寄宿舍便り「舎”キャンプ」を発行して変容が見られた関わりを指導員間で共有できるようにする。

③ 研究の対象を寄宿舍生活全般とする。

(*) 寄宿舍版ルーブリック表とは、目標達成を確認するための観点を生徒と指導員が共有し、評価するための基準が示された表のこと。観点や基準は一律に用意されたものではなく、生徒それぞれが指導員と作り上げていくものであり、対話を重ねて取り組んでいくことでその成長段階の見える化を図っている。

4 研究計画

(1) 年次計画 (令和7年度より2カ年計画)

【1年次：令和7年度】	【2年次：令和8年度】
① 寄宿舍版ルーブリック表の理解と整理	①個別の生活支援計画への寄宿舍版ルーブリック表の活用
② 4領域の指導への寄宿舍版ルーブリック表の活用	②4領域の指導方法工夫と実践

(2) 年次計画

月	寄宿舍研究への取り組み	主な内容
4	研究推進委員会① 研究推進委員会② 研究推進委員会③	・寄宿舍研究の方向性を研究部で検討し共通理解を図る ・研究推進委員会及び研究全体会に向けて資料作成
5 6	研究全体会 I 研究推進委員会④ 実践期間	・今年度の寄宿舍研究についての共通理解 (舎務会) ・研究全体会 I を受けて ・担当生徒とやり取りして個別の生活支援計画の目標を考え、成長をサポートするための寄宿舍版ルーブリック表を作成 (研究部員) ・舎”キャンプを発行して生徒支援の工夫や変容を指導員間で共有 ・寄宿舍版ルーブリック表を使った支援の実践
7	中間反省 研究推進委員会⑤	・1学期の反省と2学期に向けて研究部で検討 ・舎”キャンプを発行して生徒支援上の工夫や変容を指導員間で共有

9 10 11	個別の生活支援計画の 反省並びに後期目標と 手立てを設定 実践期間 研究推進委員会⑥	・生徒の成長段階や変容を確認して寄宿舍版ルーブリック 表を修正 ・4領域の指導における小集団でより良く活動するための 寄宿舍版ルーブリック表の作成（研究部及び領域） ・“舎”キャンプを発行して生徒支援上の工夫や変容を指導員 間で共有
12 1	研究推進委員会⑦ 年間反省 研究推進委員会⑧	・今年度のまとめと次年度に向けて ・いしずえ作成
2 3	研究全体会Ⅱ 研究推進委員会⑨	・今年度の寄宿舍研究のまとめ（舎務会） ・次年度の方向性を研究部で検討

5 研究の全体構想

寄宿舍研究主題

自ら気づき、考えて行動する生徒を育成するための生活づくりⅡ
～生徒の将来を見据えた見守り優先型の環境づくり①～

視点1

寄宿舍個別の生活支援計画に寄宿舍版ルーブリック表を活用する。

視点2

4領域の指導を通して、見守る姿勢を大切に
にした指導の在り方を検討し、共有する。

日常生活での実践

- 1 生徒自身が成長を実感し、目標に向かってステップアップしようとする姿を支援する。
- 2 生徒の気づきを大切にしたり関わりや仲間と共に問題を解決しようとする姿を支援するという考え方を共有する。
- 3 生徒の考えや行動に対して職員がどんな働きかけをしたのか事例を共有し、検証する。

実践のまとめと寄宿舍研究の評価について

- 1 今年度の主題とサブテーマは寄宿舍の実態に即して適切だったか。
- 2 視点は研究のねらいに迫り、見守り優先型の環境づくりのために適切だったか。
- 3 寄宿舍研究により生徒に変容は見られたか。
- 4 適切な研究計画が立てられ、全員で協力する体制がとられたか。

令和7年度 寄宿舍研究

主題 自ら気づき、考えて行動する生徒を育成する生活づくりⅡ
～ 生徒の将来を見据えた見守り優先型の環境づくり① ～

Ⅰ 研究の成果と課題

(1) 視点Ⅰ「寄宿舍個別の生活支援計画に寄宿舍版ルーブリック表を活用する」について

① Aさんの事例 <※ルーブリック表の作成例Ⅰ参照>

寄宿舍個別の生活支援計画 前期目標 「計画的に朝清掃をする。掃除が上手になる。」

i) 成果（寄宿舍版ルーブリック表の活用の効果）

○学校や家庭での経験を寄宿舍での清掃に活かすよう働きかけた。ホール清掃では、職業（清掃班）の授業や現場実習先でダストクロスモップを使用していることから、清掃用具の選択を自分から申し出ることができた。また、家庭で取り組んでいる「床と壁の間に残るホコリ取り」をホール清掃でも行うため、職員と一緒に適した清掃用具を見つけ、新たな清掃箇所を見つけて取り組んだ。

ii) 課題（寄宿舍版ルーブリック表との関連）

●振り返りの時間を定期的に設けることが難しく、Aさん任せにしてしまう時期があった。

iii) 改善点

・勤務体制の中で振り返りの時間を工夫する職員の計画性を持つとともに、Aさん自身から振り返りの時間を職員に求めるための働きかけをする。

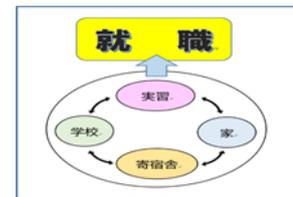
<寄宿舍版ルーブリック表の作成例Ⅰ Aさんの個別の生活支援ルーブリック表>

目標：生かしてつなげる大作戦！

<1年後の自分>

① ●●●●●社に就職する。

② 給料を貯めて好きな物を買ったり、電車に乗って旅行がしたい。



	自分もみんなも驚くほど成長できた！	今より少し成長していると実感できた！	今の自分	さばるとこうなる
（評価の観点）	○一人で行う掃除では、1週間の清掃プランを立て、時間を意識して取り組んでいます。 ○相手の意見を聞きながら、なぜ自分はそうしたのか、なぜそう思うのかをいつでも説明することができます。	○実習や学校、家庭での経験を活かして、寄宿舍でのホール清掃内容を考え相談しています。 ○わかっても時々失敗はあります。でも失敗を素直に認め、前向きな気持ちを先生に伝えることができました。 ○わからないことも自分で予想して自分なりの考えを見つけられることが増えてきました。	○寄宿舍の掃除の仕方を覚えて、丁寧に仕事をしています。 ○時々失敗してしまうけど、失敗を素直に認め、次に成功するよう気持ちを切り替えています。 ○わからないことをわからないと素直に言うようにしています。	○注意を受けることが続いて、掃除をおろそかにしてしまいました。 ○失敗がわかった後に気持ちの切り替えができず、自分を責めてしまいました。不機嫌になって乱暴な言葉遣いや態度をとったりしてしまいました。 ○わかったフリをしてしまいました。
	新幹線 (がんばり度100)	特急列車 (がんばり度75)	普通列車 (がんばり度50)	観覧車 (がんばり度25)

②Bさんの事例 寄宿舍個別の生活支援計画 前期目標「自分で起きて登校・出勤する。」

i) 成果（寄宿舍版ルーブリック表の活用の効果）

○ステップアップの方法を寄宿舍版ルーブリック表で示し、繰り返し話をした。仲間のコメントが書かれた寄宿舍版ルーブリック表を枕元に置き、朝起きカレンダーをつけながら、Bさんも目覚まし時計をセットして自力起床をするために工夫をするようになった。

ii) 課題（寄宿舍版ルーブリック表との関連）

●長期休み明けや体調不良による欠席が続いた後など、継続することの難しさがある。

iii) 改善点

・どうしてその目標を立てたのか、何をすればその目標を達成できるのか、という対話を重ねながら、Bさんの心に響くキーワードや指標行動を模索し、より自分ごとにして取り組む姿をサポートしていく。

③Cさんの事例 個別の生活支援計画

前期目標「話をする時や話を聞く時の態度（マナー）を覚え行動する。」

i) 成果（寄宿舍版ルーブリック表との関連）

○週始めは本人と話をする時間を必ず設け、意識の継続をつた。また、職員とのやりとりに集中できるよう、掲示物が少ない部屋や人の動きが視界に入らないようにした。

○女子部で年間を通して行った「女子カフェ」では、次はいつ何があるのかという活動予定を掲示することで、それを見て興味関心を持って参加するCさんの姿が見られた。また、自分に必要な力を自分で考え目標にするようにしたことで、振り返りでの活動では、「声が小さくてお客さんに聞こえなかった。」という本人の気づきがあった。

ii) 課題（寄宿舍版ルーブリック表との関連）

●Cさんが挨拶や返答を求められる場面で言葉が出ない時にどうするか、ということについてCさんと職員とが共有できる評価の観点が見つけられていない。

iii) 改善点

・Cさんの行動を受けた職員の「うれしかった。」という気持ちを伝え自信や安心感につなげる。また、「自分の声が相手に聞こえていない時には、一歩近づいてもう一度話をしよう。」等の具体的な行動を示し、生活の中で実際に行動できる場面を作り成功体験を増やす。

(2) 視点2「4領域（生活、社会、自主、健康）の指導を通して、見守る姿勢を大切にしたい指導の在り方を検討し、共有する」について

①第2回挨拶強調週間の取り組み（社会領域）

第2回挨拶強調週間（概要）

- ・期間 9月29日～10月8日（後期現場実習前）
- ・準備期間中に、「挨拶する際に気をつけていること」や「他の友だちが気をつけていること」をインタビューしたことを踏まえて、寄宿舍版ルーブリック表を作成する。
- ・作成した寄宿舍版ルーブリック表をもとに強調週間に取り組む。
- ・事後に生徒と担当職員とで振り返りを行い、現場実習と実習後の生活につなげる。

i) 成果

- Dさんは準備期間に他の生徒へインタビューをしたことで、仲間の姿に目を向けてループリック表を作成し、取り組むことができた。〈※ループリック表の作成例2参照〉
- Eさんは、前期現場実習の評価を受けた「声が小さい」ことを踏まえて、「相手より先に挨拶すること」を目標にして後期現場実習前の強調週間を過ごした。
- FさんとGさんは部屋単位でのループリック表を作成した。他の生徒へインタビューをして、なぜ好感、好印象を持ったのか、真似したいのかを考え、どのような行動をすると良いのかを話し合った。レベルアップにつながる具体的な姿を可視化することができた。

ii) 課題

- 挨拶に対して掲げる「目標」とループリック表の各項目に「目標」があり混同した。
- 準備期間と強調週間が短く、もっとじっくり取り組む時間が欲しかった。
- Dさんの事例では、模範的な姿に終始せず、「面倒な時もあるけど、そんな時はどうするか。」等、さらに一步踏み込んだ生徒同士の対話ができるようになった。
- Eさんの事例では、「他の友だちへのインタビュー」を踏まえてループリック表を作成したため、可視化できる姿が描写された目標になっておらず、対話の深まりにくさを感じた。

iii) 改善点

- ・強調週間では、「生徒に働きかけ」「生徒の変容を待つ」ために適切な期間設定をする。
 - ・例えば「今の自分は相手の顔を見て挨拶している。」という日常的に取り組んでいる姿を肯定し、一步前進を感じる具体的な姿をイメージするための評価の観点を設定する。
- <寄宿舍版ループリック表の作成例2 Dさんの挨拶強調週間ループリック表>

2025 9/29~10/8		第2回あいさつ強調週間 『難関に挑戦!誰にでも同じようにあいさつをする』	
できたら最高	一步前進できた	今の自分	みんながっかり
<良かったところ> 聞いていても、挨拶を受けても気持ちが明るくなる。	<良かったところ> 笑顔と挨拶が一体化している。	<良かったところ> 挨拶の音が明るい。	<こんな姿> 気持ちがない。 言葉だけ。
目標:人によって挨拶を変えない	目標:相手を見て互いに気分が良くなる挨拶	目標:自分も相手も気分が良くなる挨拶	<こんな姿> 相手が気分を悪くする挨拶
<改善できるところ> 忙しい時にどんな挨拶を返せるのか。どんな挨拶をされたら気分が良いか。人によって挨拶を変えない。難関です。	<改善できるところ> 一体化した挨拶にならない時、自分でどんな気持ちや行動になっているのか気づいていますか?	<改善できるところ> 後ろ向きで挨拶する時がありますよ。	<こんな姿> 聞こえないふり。 本当に聞こえないなら仕方ない。
がんばり度MAX	がんばり度75%	がんばり度50%	がんばり度25%

②領域指導を通した「見守る姿勢を大切にした指導」の工夫

i) 成果

- 「声をかけたが浴槽に浸からなかった。」という入浴に関わる職員間での引継ぎを受けて、浴室脱衣場に『浴槽に入ると得られる3つの効果』という掲示をした。その掲示を見たある生徒は、浴槽に入りたがらない生徒に「しっかり温まった方がよいよ。」と生徒同士で声をかけ合う様子が見られた。

- リーダーとなる生徒がグループを引っ張ることができるよう、清掃・配膳の当番活動では、職員がリーダー役を担う期間を設けた。振り返りのイメージを持って活動に入れるようにしたことで、配膳活動の振り返りでは、リーダーの生徒から「今日はお盆を置く位置を間違えてしまった。次回はしっかり確認しましょう。」というまとめの話や、前回のポイントをメンバー全員で確認してから活動を始めるリーダーの姿があった。
- 舎友会の執行部会や行事の実行委員会を行う際には、話し合う内容と「自分の考えをまとめてくること」を事前に伝えるようにした。話し合いがスムーズに進められただけでなく、「自分だったらこうしたい。」と積極的に意思表示をする姿につながった。

2 一年間のまとめ

(1) 寄宿舍での学校研究への取り組み

① 成果

- 「挨拶強調週間」において寄宿舍版ルーブリック表を作成したことについて職員反省アンケートを実施し、以下のような意見があげられた。
 - ・挨拶をどう捉えどう考えているのか、等を知ることができる良い機会だった。
 - ・生徒と話す時間が少なく、自己流になってしまった。内容を理解しておらず反省。
 - ・強調週間中に表を見て振り返りをするすることで、生徒が意識できるような働きかけができたと思うが、目標設定・活用の仕方・評価の仕方がよくわからなかった。

② 課題

- 「寄宿舍版ルーブリック表の活用」について、指導員と生徒1対1で作成するもの、指導員と複数の生徒とで作成するもの、職員間の共通理解を図るためのもの（令和6年度実践報告集いしずえ参照）等、様々な活用方法があることがわかってきた。
- 「見守る姿勢を大切にしたい指導の在り方」について、生徒自らの発信や生徒同士の関わりにつなげるために必要な働きかけを職員間で共有するまでに時間を要してしまう。

③ 改善策

- ・寄宿舍版ルーブリック表の活用方法をさらに明らかにしていくとともに、生徒自身がステップアップしていく姿が具体的に可視化できるルーブリック表の作成に取り組む。
- ・日々の引継ぎをもとにしながら、「今できていることは何か。」「これからどうあると良いのか。」について生徒の担当職員と共に領域担当職員が整理し、全職員で共有していく。

(2) 考察

- ・2カ年計画の1年次である今年度の研究は、これまで研究部員が中心となって作成してきた「寄宿舍版ルーブリック表」の取り組みを全職員での取り組みへと広げた。その作成方法や活用の仕方について、今後も理解を深めていく必要がある。
- ・その一方で、男子部、女子部や4領域の指導において、生徒にとって「学びのロードマップ」となり、主体的に成長しようとする姿をサポートとすることをねらいとして様々な工夫がなされていることを強く感じる。
- ・今年度の取り組みをもとに、寄宿舍個別の生活支援計画や4領域の指導方法の工夫を明らかにしていくことで、生徒の将来を見据えた見守り優先型の環境が、研究主題にさらに迫っていくことができると考える。



令和7年12月25日
 寄宿舍研究だより No. 3
 発行：鶴岡高等養護学校
 研究推進委員会

「自ら気づき、考えて行動する生徒を育成する生活づくり」

女子部の実践 ～女子カフェ～

今年度女子部は人数が少ないことからお互いに相手を意識しやすい環境にある。この環境を生かし「相手のことを考えながら行動できる力の育成」に触れた実践として**女子カフェ**を行ってきた。店員に求められる接客のスキルと、生徒に付けたい力につながりをもたせながら進めたこの取り組みは、研究主題の「自ら気づき、考えて行動する生徒を育成する生活づくり」の視点からも有効な取り組みと捉えた。女子カフェの実践について個別の生活支援計画の目標と手だての関係性と生徒の変容を事例としてまとめた。

◆事例：生徒 A のケースについて

<個別の生活支援計画>

目標	指導の手だて
話をする時や話を聞く時の態度(マナー)を覚え行動する	<ul style="list-style-type: none"> イラストやカードを使って、顔の向け方や姿勢や相手の気持ちについて伝える。 職員が手本を示し、本人と一緒に模倣しながら良い態度のイメージを積み重ねる。 職員は本人と目線が合うまで待つ。 称賛はわかりやすく簡潔に伝える。

1 生活の中での働きかけ方について

- ・週始めに顔の向け方や相手の気持ちなどについて本人とやりとりをする時間を設ける。
- ・やりとりを行う時は掲示物が少ない部屋で、周囲の動きが視界に入らない位置で行う。
- ・わかりやすい言葉で伝えたり、理解しやすいイラストや写真を使ったりしてやりとりを行う。
- ・他の生徒と関わり合える場面では生徒 A の言葉を他の生徒に伝えたり、友達の言葉を生徒 A に伝えてりして関わりを広げる。
- ・生活の様子や実践の様子で見られた良い変化を文章や写真を使って保護者へ伝える。

2 女子カフェでの様子について

	目標	本人の様子
		実践後、生活の中でとった手だて
1回目	カフェの雰囲気を感じる。	<ul style="list-style-type: none"> ・終始、下を向いている。 ・店員に注文の音が届かず、希望のメニューを指で指して伝えた。 →カードやイラストを使って顔の向け方を確認し合うようにした。 →興味のある会話で引き付け、目線が合うタイミングで肯定的な言葉がけをするようにした。
2回目	自分で注文する。	<ul style="list-style-type: none"> ・下を向いたまま注文したため店員が聞き取れず聞き直しをされた。店員が近づいてくれたことで伝わった。 ・時々顔を上げ、周囲の装飾に目を向けていた。 →カードやイラストをつかって顔の向け方を確認し合うようにした。 →準備物を生徒同士で作る場を設定し、最初は職員も一緒に参加して生徒同士が関わり始めたら職員はその場から離れて様子を見守るようにした。

3 回 目	自分で注文する。	<ul style="list-style-type: none"> ・お客様役の友達の話かけに顔をあげて聞いたり、短い言葉で答えたりする様子が見られた。 ・顔は下向きではあるが自分で注文できた。 ・店員の動きを興味深く目で追う姿が見られた。 ・活動後の後片付けに自ら参加。職員の呼びかけにも「はい」と返事が見られた。 ・次回の店員に自ら希望した。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> →店員の伝え方を書いたマニュアルを準備し練習を行った。 →マニュアルを家庭に持たせた。
4 回 目	店員をやってみる。	<ul style="list-style-type: none"> ・休日、母親と女子カフェの話題になり、母親と接客の練習を行った。 ・お客様に聞こえる声で接客する様子が見られた。 ・接客の途中、声量が弱くなる時があった。 ・仲間から「聞こえるよ。」と言葉をかけられ照れていた。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> →相手に自分の声が届いた理由（顔の向け方、伝えようという気持ち）や、相手の気持ちと自分の気持ちに触れた言葉がけを行い自信につなげるようにした。

3 実践(女子カフェ)の工夫について

「取り組みがわかる掲示物」

- ・観覧車に見立て、女子カフェの予定がわかるようにした。
- ・見える場所に掲示し、いつでも目に触れるようにした。

「自分で目標を立てる」

- ・実践の後は振り返りを行い、自分に必要な力について聞き合った。
- ・自分に必要な力を次の実践の目標とした。

「生徒同士が関われる場の設定」

- ・店内の装飾や看板やメニュー表などを生徒同士で話し合ったり、一緒に作り合ったりする場を作った。



4 生徒同士の関わりについて

○装飾作りで、友達の作り方を見て切ったり、貼ったりして、お互いの作った物を見せ合う様子が見られた。

○タブレットを使ってBGMを検索し合ったり、友達の好きな曲に耳を傾けたりする様子が見られた。

○職員が作った看板の見本を参考に、自分たちのアイデアで色を塗ったりイラストを描き足したりした。

自分たちで作業を分担しながら完成させた。

△仲間の「Aさん、顔を上げないと相手に声が聞こえないよ。」

言葉を受けて顔を上げようとする姿が見られた。



5 生徒の変容について

生徒 A は挨拶する時や返答を求められるような場面で緊張しやすく、相手に顔を向けられなかったり、黙ってしまったりする実態から仲間との関係もぎくしゃくしてしまう様子が見られた。生徒と生徒の間に職員が入りながら女子カフェに向けた準備を重ねるごとに会話が少しずつ増え、BGMを選択する時には好きなアーティストについて会話が盛り上がる様子が見られた。仲間との関わりが、仲間の店員姿に興味をもち、自ら女子カフェの店員にチャレンジする姿につながったと感じる。4回目の実践後には、夕食中に自分から仲間に歌番組の話題をしたり、仲間の楽しそうな声に気づくと「何?何?どうしたの?」と話しかけたりして一緒に大笑いする様子や生活の中で職員に顔を向けて挨拶したり、伝えたりする姿が増えた。

6 職員同士の情報の共有について

- ・毎日行っている職員女子部会で、PDCA サイクルの観点で実態や手だてについて意見交換をし合った。
- ・いつでも、だれに対しても態度が変わらないように、対応の仕方について全職員で共通理解を図った。

・女子カフェ3回目 … 仲間の店員姿を目で追う様子が見られた。



・女子カフェ4回目…店員に立候補！



目 標 「店員をやってみる」
 手だて お盆にマニュアルを貼り
 安心して臨めるようにした。
 ○マニュアルを見ながら接客する
 姿が見られた。
 ▲接客の最中、声量が弱くお客様
 に聞き直しを求められる場面が
 見られた。

《実践後の様子》

『中秋の名月の茶話会』
 ・友達に「お茶どうぞ」と渡す
 様子が見られました。
 女子カフェ店員の経験を発揮！



<まとめ>

将来に必要な力と店員のスキル(挨拶・表情・礼儀)につながりを持たせた「女子カフェ」の実践は、店員に扮することで自分に必要な力に気づいたり、仲間の姿から刺激を受けて行動したりする変化が見られた。また、個別の生活支援計画を生かし、実践を行い、再び個別の生活支援計画を確認しながら進めた有効な取り組みにもなった。

今後も切れ目ない支援体制を組みながら、生徒のできる力を引き出し、伸ばせる支援方法を探っていきたいと思う。